

カフカの『断食芸人』

—書く人として生きる—

佐々木 博 康

Kafkas *Ein Hungerkünstler*

— als Schreiber leben —

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第35巻第2号

2013年10月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 35, No. 2, October 2013

OITA, JAPAN

カフカの『断食芸人』

—書く人として生きる—

佐々木 博 康*

【要 旨】 カフカの『断食芸人』は、1922年5月に執筆され、1924年8月刊行の短編集『断食芸人——四つの物語——』に収められた。断食を見世物として観客に供することで生活の資を得ていた断食芸人が、檻の中で孤独に死んでいくまでを扱った三人称形式の作品である。断食をする断食芸人は、生の世界のさまざまな享楽——「食べること」に譬えられている——から遠ざかり、「書くこと」＝文学に没頭する作者の分身である。この物語を通じてカフカは、自分のこれまでの生き方を振り返り、それでよかったのかを問うている。断食芸人が自分の生き方に確信をもって死んだことは、書き続けるのが自分の人生であり、それ以外に生きようがなかったことをカフカが確認するに至ったことを示している。

【キーワード】 断食芸 豹 未知の糧 世間 芸術家

はじめに

カフカの短編『断食芸人』が成立したのは、1922年5月23日頃と推定されている。日にちまではっきりしているのは、同年5月25日のカフカの日記に、「おととい、『断食芸人』¹⁾という記述があるからである。『ノイエ・レントシャウ』誌などに発表された後、短編集『断食芸人——四つの物語——』に収められて刊行されたのは、2年後の1924年8月末のことである。カフカが同年6月に亡くなったので、友人のプロートが校正を引き継ぎ出版にこぎつけたのである。

『断食芸人』が書かれた1922年は、しばらく執筆を中断していたカフカが再び旺盛な創作欲を見出した時期で、長編『城』の執筆が開始され、同時に多数の短編が書かれた。チェコ人女性ミレナとの関係も終わり、また結核の進行もとどめることができないという状況で、カフカは迫り来る死を予感しつつ、これまでの人生を総括しようとしていたと思われる。

『断食芸人』は、語り手が断食芸人について報告する三人称形式の作品である。あらすじは次の通りである。

平成25年5月31日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育福祉科学部情報国際教育講座 (ドイツ文学)

断食芸人は断食を見せ物にすることで生活の資を得ている。藁を敷きつめた檻に入り、少量の水以外には一切の食物を摂らない。観客から選ばれた三人一組の見張りが昼も夜も監視にあたる。断食が進むにつれて人々の関心が高まり、大勢の見物客が訪れる。そして四十日目には、円形劇場で音楽が盛大に演奏されるなか、興行師の指示で断食芸人は檻を出され、二人の若い女性に導かれて小卓で病人用の食事を取る。これがクライマックスとなる。観客はこの興行に満足していたが、断食芸人だけは不満を抱えている。それは四十日で断食をやめなければならないからである。彼は無限に断食を続けることができると主張するが、四十日を超えて断食を続けることは興行師が許さない。この期間を超えると人々の興味が薄れ、客の入りが悪くなることを知っていたからである。

やがて絶大な人気を誇っていた断食芸に対する関心が急速に衰えていく。人々の嗜好が別の見せ物に移ったのである。断食芸人は興行師と別れ、大きなサーカスに雇われる。今や彼は自分が望むだけ断食を続けることができるようになる。しかし、人々のお目当ては動物たちであり、彼らは断食芸人の檻の前を通り過ぎていくばかりである。断食芸人はサーカスで働く人たちからも忘れられていく。

あるとき、監督の一人が断食芸人の檻に気づき、声をかける。断食芸人は、自分が断食を続けていたのは口に合う食物を見つけることができなかつたからであって、見つけていたらみんなと同じように腹一杯食べていたでしょう、と言って息を引き取る。断食芸人のいた檻には若い豹が入れられる。生命力と自由にあふれる豹は大勢の見物人を魅了してやまない。

断食芸というと、いかにもカフカらしい突飛な空想の産物であるように思われるが、19世紀の終わりから20世紀初めのアメリカやヨーロッパで、サーカス、寄席、見世物、歳の市などにおいて実際に演じられていた芸である。カフカの描いている断食芸には、この実際の断食芸と共通している面が多々あるようである²⁾。

本稿では、『断食芸人』についてのこれまでの解釈を概観した上で、まずこの物語を読む一般読者にとって謎と思われるいくつかの点を作品に沿って明らかにし、次いで作者カフカにとってこの物語がどのような意味を持っていたのかを考察する。

I これまでの解釈

1. 精神的実存への道——フォン・ヴィーゼ

最初の本格的な『断食芸人』論を書いたのは、ベノ・フォン・ヴィーゼである³⁾。彼は、断食芸人を「禁欲に基礎を置く自由な精神的存在」⁴⁾と捉え、虚偽的な世間と対立させる。

フォン・ヴィーゼによれば、世界に居場所を見出せない断食芸人は、「精神へと孤独に突き進む」⁵⁾。カフカが断食芸人を通じて浮かび上がらせようとしているのは、「生命的なものの否定が、同時に絶対的で精神的な実存への道……を開くことになる」⁶⁾ということである。しかし、カフカは単純に断食芸人を肯定的に、世間を否定的に描いているわけではない。世間の人々の旺盛な生命力を体現する豹は肯定的である。カフカが断食芸人を否定的に描いたのは、世間においては精神には自分を正当化する可能性が与えられていないことを示すためである。それが現代における精神の位置なのであり、カフカはあえて精神の力という真実を覆い隠すことで、この虚偽の世界に精神が現前することを願ったのである。

フォン・ヴィーゼは、この作品に例外的芸術家と虚偽的世間の対立、また精神と生の対立を見、前者を極めて高く評価する。精神による生命的なものの徹底的な否定は結局死につながざるを得ないが、それさえも自己の完成としてポジティブに捉えるのである⁷⁾。

2. 肯定的な断食芸人像の修正——ポリツァー、ヘーネル、ヘルムスドルフ

その後の研究は、フォン・ヴィーゼの断食芸人に対する肯定的評価を修正する方向に進む。断食芸人を絶対化せず、冷静なまなざしが向けられるのである。

フォン・ヴィーゼ以後もあまり変わらないのは、断食芸人が求めているのが死の彼方にある一種の真理であるとされるところである。ハインツ・ポリツァーはそれを、「精神の中にある確かさ」や「完全さの中の確かさ」と呼び⁸⁾、インゲボルク・ヘーネルは生を超越した真理と見なす⁹⁾。このような真理への無条件の探究者であるという意味では、断食芸人は肯定的に見られるのであるが、真理が死の彼方にしか存在しないものであるという点で、断食芸人の目標が疑問視されることになる。たとえばポリツァーは、断食芸は死ぬときに完成する「死の芸術」であると述べ、断食芸人は「完全さ」という「致命的な理念」とらわれていると批判する¹⁰⁾。

断食芸という特殊な芸についても問題にされる。断食芸はそもそも芸と呼べるようなものではなく、単なる「欠乏の産物」¹¹⁾にすぎず、そのようなものを芸と称するのは欺瞞にほかならないと非難される¹²⁾。ポリツァーもヘーネルもクラウス・ヘルムスドルフも、断食芸人は最後にこの欺瞞を告白して謝ったのだと考える¹³⁾。ヘーネルはそれによって断食芸人は真理に回帰したのだと述べるが¹⁴⁾、ヘルムスドルフは断食芸人が自分のしたことは失敗だったという意識を抱いて死んでいくと言う¹⁵⁾。フォン・ヴィーゼが断食芸人の謝罪の理由を、生命的なものを克服したことを精神は誇ってはならないからであるとし、それが例外者の宿命であると解釈した¹⁶⁾のとは大きな違いである。一方、豹については生命力の象徴としておおむね肯定的に受け取られる。ヘルムスドルフは、生きる喜びを体現する豹に観客がひきつけられるのは当然であるとする¹⁷⁾。

3. 断食芸人は自己中心的——シェパード

断食芸人に対してもっとも厳しい判断を下したのはリチャード・シェパードである¹⁸⁾。彼は断食芸人を人間として心理学的に考察するとどうなるかという観点から見ていく。

シェパードによれば、断食芸人は自分の芸を窮めることに中毒状態になっている。それはあるがままの自分を受け入れることができないからである。人間としての限界を受け入れず、絶対的な断食という理想を頑強に追い求めるが、この理想は死と同義であり空虚でしかない。また断食芸人は自分が偉大であるという虚構にとらわれており、それに由来する根深いプライドのために人々に背を向けている。断食芸人の自己陶醉は、「精神的自慰」¹⁹⁾に等しい。死に臨んだとき、ようやく断食芸人の自己中心主義が消える。断食芸人は初めて自分がしてきたことを理解し、人々に謝罪する。

シェパードにおいては断食芸人がけんもほろろの扱いになっているが、これはフォン・ヴィーゼの芸術家至上主義的な解釈に対する徹底的な反発から来ているだろう。シェパードはフォン・ヴィーゼとは逆に、完全に世間一般の人々の立場から断食芸人を見ている。

4. 楽園への回帰をめざす対抗神話の試み——ノイマン

ゲルハルト・ノイマンはそれまでとはまったく別の観点から、断食芸人を肯定的存在として絶対化する。ノイマンの解釈は壮大である²⁰⁾。

ヨーロッパ文化は墮罪神話における禁止から始まる。「食べるな」という神の禁止に逆らって楽園の果実を食べた人間は、罪を負って楽園から追放される。以来、神ではなく人間が「法」を作ることになる。つまり、「食べる」ことによって「法」が導入されたのである。許可と禁止の記号体系が作り上げられ、ヨーロッパ文化を形成する。しかし同時にヨーロッパの文明人は身体性を喪失し、抽象的な記号体系の中で、許可と禁止の強制に従いつつ生きざるを得なくなる。儀礼による抽象的な記号ゲームに陥っているのが現在のヨーロッパ文化である。従って墮罪以前の、あらゆる強制から自由な、純粋な快楽の状態に戻ることが重要となる。「自分の口に合う食物を見つけることができなかつた」という断食芸人の最後の言葉は、ヨーロッパ的な文化を全面的に否定するものである。食べない行為は、墮罪以前の、身体や自然が世界を経験する基盤となっていた楽園への回帰をめざす試みである。断食芸人は墮罪神話に対する対抗神話を創出しようとしているのである。

ノイマンはまた、豹についてもこれまでとはまったく異なる見方を示す。断食芸人と豹は対立関係にあるのではなく、ヨーロッパ文化に対して異質な存在として同じ側にあるというのである。断食芸人の食べることを拒否した身体と、豹が象徴する自然や野生の生命力は、ともに「異質のまなざし」²¹⁾としてヨーロッパ文化を脅かすものとされる²²⁾。

5. その他の解釈——ビーメル、バイケン、パウル・ヘラー、アルト

その他にも独自の視点からの興味深い解釈がある。いくつか展望しておこう。

ヴァルター・ビーメルは、この物語で扱われているのは芸術の問題ではなく、「自由」の問題であると言う²³⁾。断食芸人は自ら檻に入って自由を放棄してしまうが、人間のこのような自己放棄は「ニヒリズム」²⁴⁾にほかならない。一方、豹は断食芸人とは対照的に十全に自己実現を果たしている自由な存在である。

ペーター・バイケンは「疎外」をキーワードにしてこの作品を読み解く²⁵⁾。断食芸人と大衆とのつながりの喪失は「全面的な疎外の表現」²⁶⁾である。断食芸人は自分だけの動機を追求し、「狂信主義と自己逃避と過度の禁欲主義」のために「人間として間違った方向」に進んでいる²⁷⁾。断食芸人の立場は「人間の生の根本原則への違反」²⁸⁾であり、断食芸が人々の関心と呼ばなくなった本当の原因はそこにある。しかし、「楽しみ」を追い求めるだけの大衆もまた問題である。この作品に描かれているのは、「疎外された個々人が、置かれた状況から出られないで循環しているという宿命」²⁹⁾である。

パウル・ヘラーは、カフカの作品にたびたび登場する食物のモチーフを取り上げ、それを社会ダーウィニズムと関連づける³⁰⁾。肉を食べる人々が生きている世界とは弱肉強食の世界、生存をめぐる戦いの世界である。肉を食べることを拒絶する断食芸人は、世界が強者の原理で動いていることを洞察し、この世界から離脱しようとする存在である。自然淘汰の面で有利な体を所有している豹は、生存競争の勝者である。しかし豹は自分自身が檻の中に入れており自由ではないことに気づいていない。それに対して断食芸人は世界を支配する生存競争のルールを認識し、自由意志で敗者となることを選択したのである³¹⁾。

ペーター＝アンドレ・アルトは再び芸術と生の問題に戻るが、新しい観点も導入する³²⁾。ア

ルトによれば、断食芸人は生涯の終わりに近づき、もはや芸術的効果を上げるためのオーラを持たなくなった老いた芸術家である。断食芸人は自分の芸がもはや賞賛に値するものではなく、同情されるのが関の山であることを知っている。知っていながら隠している。一方、豹は力と生命力にあふれる存在であり、エネルギーに自己を主張する。断食芸人は、豹＝生によって「殲滅」³³⁾される。「力強い生の大河」は「敗者」³⁴⁾である断食芸人の死とは無関係に続いていく。

以上見てきたように、断食芸人を肯定的に評価する者、否定的に見る者などさまざまである。またこの作品のテーマをどう捉えるかという点でも、解釈者ごとに実に千差万別であることがわかる。

II 作品に対する疑問

この作品は大きく三つの部分に分けられる。断食芸人が興行師と行を共にする第一部、興行師と別れサーカスに雇われる第二部、そして断食芸人の最後の様子が語られる第三部である³⁵⁾。

第一部の断食芸人は、断食芸によって多くの観客の拍手と賛嘆を得ている。しかし、観客という他者からの評価よりも、自分がどこまで断食できるのかを徹底的に試してみたいと思っている。第二部に至って、自分の限界に挑戦する機会を得る。どこまで断食し続けることができるのか、また周囲の人々はどうか反応するのか、そして物語はどのような結末を迎えるのか、——これらの点が読者の興味を喚起する。しかし第三部において、読者は断食芸人の奇妙で不可解な言葉を聞くことになる。

この作品の大きな謎をまとめれば、次のようになるだろう。

1. なぜ断食芸人はサーカスの監督に向かって赦しを乞うのか
2. 断食芸人の最後の言葉は何を意味しているのか
3. 断食芸人が死んだ後に登場する豹にはどのような意味があるのか
4. そもそもこの作品は何を描いているのか

まずこれらの疑問について、作品に沿って見ていく。その際、カフカの他の自伝的作品群においてもテーマとなっている「世間」との関係に着目する³⁶⁾。

III 作品の考察

1. 第一部——世間と妥協しつつ

第一部の断食芸人は、観衆の喝采を浴びており、外面的に見れば芸人として社会的成功を収めている。しかし、断食芸人は非常に不満である。興行としての成功を優先させる興行師が断食期間を四十日間³⁷⁾に限定しているために、思う存分断食ができないからである。

どうしてみんな私の栄誉を奪い取ろうとするのか。このまま断食を続けて、あらゆる時代を通じてもっとも偉大な断食芸人——おそらく私はすでにそのような存在なのだ——にな

るだけでなく、さらに自分の可能性を試し、想像を絶するものに至るという私の榮譽を。
(D339) ³⁸⁾

断食芸人は、自分は「あらゆる時代を通じてもっとも偉大な断食芸人」であると自負している。それは驕り＝ヒュブリスと言えるほどのものとなっている。

また、断食芸人は興業に伴うさまざまな虚偽にも反発を感じている。興行師の派手で大仰な演出に従わざるを得ないし、「痛ましい殉教者」(D339)に仕立て上げられることも甘受しなければならない。興行師の嘘に反論することもできない。たとえば興行師は、断食を中断せざるを得なかったために絶望してぐったりしている断食芸人の写真を見物人に見せて、断食芸人はもっと長い期間断食ができると主張しているが、四十日目にはこんなに衰弱しているのだとほめかす。断食芸人は激しい怒りを感じる。

毎度のこととはいえ、そのたびごとに新たに断食芸人をやりきれない気持ちにするこの真実の歪曲はあまりのことであった。断食を早めに切り上げた結果生じたことが、今や主張を覆すための理由づけに使われているのだ！このような無分別に対して、このような無分別の世間に対して戦うことは不可能だ。(D342)

断食芸人の怒りは直接的には興行師に向けられているのだが、「このような無分別の世間」と一般化されている。興行師ばかりでなく、ショーとしての断食芸にしか興味のない観客、いかさまをしていると決めつけている見張りたちなどの周囲の人々が「世間」として捉えられ、彼らの虚偽性に断食芸人は強い不満を感じている。

このように、第一部での断食芸人は十分に自己実現できているとはいえ、観客の願望やその意を汲んだ興行師の欺瞞的な演出に従いながら生きている。自分を抑えつけて、世間とある程度妥協しながら生きているのである。

2. 第二部——世間から隔絶して

サーカスに移った断食芸人は、断食芸を徹底的に追究する機会を得る。観客や興行師などの周囲の人々の思惑を顧慮することなく、思う存分断食をすることができるようになる。しかし観客はもはや断食芸に関心を示さなくなっている。断食芸人の檻が置かれるのは、演芸場の外の動物置き場への通路である。

最初のうちは彼は上演の休憩が待ち遠しくてたまらなかつた。感激して彼は転がるように自分の方に駆けてくる大勢の人々を迎えたが、やがてすぐにわかったのは——どんなに頑なに、ほとんど自分に嘘をついてまで否定しようとしても、そのたびに思い知らされることになった——彼らが行くことを望んでいるのは本当はたいてい、いつもいつも、例外なく、徹頭徹尾、動物置き場だったということである。」(D345)

第一部の断食芸人は大勢の観客から歓呼で迎えられたにもかかわらず、思うとおりに断食させてくれない観客に不満を感じていた。思う存分断食できるようになった今、断食芸人は必死に観客を求めるようになる。しかし、観客が見たがるのは動物たちであり、人々は断食芸人の

前を通り過ぎていく。「本当はたいがい、いつもいつも、例外なく、徹頭徹尾」と副詞や副詞句が連ねられているが、これは断食芸人が観客に対する期待を裏切られていった過程を表現しているだろう。

やがて断食芸人は人々から完全に忘れ去られる。

そういうわけで断食芸人は、かつて自分が夢見ていたように引き続き断食を続け、そして当時彼が予言したように苦もなくそれは続いたが、日数を数える者は誰もいなかった。誰も。断食芸人自身でさえ自分の記録がどれほどに達したかを知らなかった。彼の心は重くなった。(D347)

あれほど記録の樹立にこだわっていたにもかかわらず、断食期間の表示板が更新されなくなったことに対して、断食芸人はもはや何も言っていない。「彼の心は重くなった」と述べられているが、いったい何を考えているのだろうか。

そのことがわかるのは、表示板の断食日数を見た一人の男が「いかさまだ」(D347)と言ったときである。語り手は断食芸人の反発を次のように代弁する。

それは無関心さと生まれつきの悪意がでっち上げうるもっとも愚劣な嘘であった。というのも、断食芸人がだましているのではなく——彼は誠実に働いていた——世間のほうが彼に与えるべき報酬をだましとっていたからである。(D347)

自分の断食記録に対して、本来なら世間は榮譽で報いるべきなのに、自分を認めないどころかいかさま扱いさえする。そのことに対して、断食芸人は激しい怒りをたぎらせている。

第一部におけるように、世間と妥協して生きれば十分な自己実現ができない。かといって、第二部におけるように、世間との関わりを絶って自分の道をひたすら追い求めても、そこで達成したことを認めてくれる人がいなければ自己実現は意味をなさないのである。読者は、いったい断食芸人はどうなるのかと思いつながら、第三部へと読み進むことになる。

3. 第三部——新しい認識の獲得

(1) なぜ断食芸人は赦しを乞うのか

第三部で、断食芸人はサーカスの監督の一人と言葉を交わす。監督に「みなさん」と呼びかけているが、それは断食芸人が監督を通じて世間と対話しているからである。

「みなさん、私を赦してください」と断食芸人はささやくように言った。それは耳を檻に寄せていた監督にしか聞こえなかった。「もちろんだとも」と監督は言って、断食芸人の状態をほかの者に知らせるために指を額にあてた。「俺たちはおまえを赦してやるよ」(D348)

断食芸人の監督への最初の言葉は謝罪である。彼はこれまで、世間の人々が自分の断食記録をまったく評価しようとしないうちに憤懣を覚えていた。ところがここでは一転して謝っている。なぜ赦しを乞わなければならないのだろうか。

「ずっと私はあなたたちが私の断食に感心してくれるのを望んでいました」と断食芸人は言った。「俺たちは感心しているさ」と監督は相手の意に添うように言った。「でも感心してはいけないんです」と断食芸人は言った。「うん、じゃあ感心するのはやめよう」と監督は言った、「でもどうして感心してはいけないんだね?」「なぜなら私は断食をせざるを得ないからです。断食しないでいることはできないんです」と断食芸人は言った。(D348)

断食芸人が謝るのは、自分が世間の賞賛に値しないにもかかわらず、それを求めていたことを悟ったからである。普通に食欲のある人間が、その食欲を抑えて断食をすれば、それは苦しいことである。それゆえ、苦しみに耐える人間に対して人々は感心し、賞賛を惜しまないだろう。そして、断食をした人が自分の忍耐力に対して人々の賞賛を求めるのも当然である。しかし断食芸人は「私は断食せざるを得ない」、「断食しないでいることはできない」と言っている。普通の人々が「私は食べざるを得ない」、「食べないでいることはできない」と言うのと正反対の言葉である。人々にとって「食べること」が自然なことであるように、断食芸人にとっては「食べないでいる」ことが自然なことだったのである。もちろん「食べる」ことへの欲求をもたず、それゆえ断食が苦しみとはならず、あっさりやってのけられることであったとしても、それは芸となるだろう。それは普通の人々にとっては不可能を可能にする驚くべき事柄であるだろうし、人々の賛嘆的となるにちがいない。しかし、断食芸人にとっては、それは人々からの賞賛を求めるべき事柄ではないのである。自分にとって自然なことをしているにもかかわらず、世間の賞賛を求めたこと、そのことに対して世間の人々に赦しを乞うのである。

(2) 最後の言葉の意味は?

断食芸人の言葉に驚いた監督は、「どうして断食しないでいることができないんだね」と尋ねる。そして断食芸人の最後の言葉が語られる。

「なぜなら私は」と断食芸人は言って、その小さな頭を少し持ち上げた。そして、一言も聞き漏らされることがないように、キスをするときのように唇をとがらせ、監督の耳もとにささやいた、「なぜなら私は、自分の口に合う食物を見つけることができなかったからです。もし見つけていたら、私はきっと注目を集めるようなことはせず、あなたやみんなと同じように腹一杯食べていたでしょう。」(D348f.)

この言葉から明らかになるのは、断食芸人がもう長い間、記録や世間の栄養などに関心を持たず、まったく異なる次元の問いを自分に向けてきたということである。それは、なぜ自分はこのような存在なのかという問いである。なぜ自分は普通の食べる人々と異なるのか、なぜ自分にとって断食をすることが簡単なのかという問いである。そして見出したのが、第一に、自分も根本的には「あなたやみんなと同じよう」な「食べる人」であったということ、そして第二に、自分が「食べない人」として生きてきたのは、ただ「自分の口に合う食物を見つけることができなかったから」にすぎないということである。これが完全な孤独の中で断食芸人が獲得した新しい認識である。

この認識は次のような要素を含んでいる。まず第一に、自分が世間の人々と同じ「食べる人」であったという自覚は、断食芸人にとってコペルニクス的転回と言えるほどの大きな認識の転

回である。自分が特殊な存在であり、偉大な能力を持っているというそれまでの自尊心の根拠が崩れてしまう。人々から賞賛を求めるいわれはなくなるのである。

第二に、「自分の口に合う食物を見つけることができなかった」という言葉からわかるのは、世間一般の人々が食べたいと思う物を食べたいとは思わなかったということである。だから断食芸人にとって断食が容易なのであり、だからこそ断食芸を生業として生きるようになったのである。

第三に、根本的には断食芸人も「食べる人」だったとはいえ、「自分の口に合う食物」を見出していないという点で、やはり世間一般の人とは異なる。そのことを再確認したのである。そしてこのことは、断食芸人に新たな生きる目標を与えることになる。つまり、「自分の口に合う食物」、『変身』で使われている言葉を借りれば、「未知の糧」(D185)を求めて生きるという目標である。

第四に、ここに至って断食芸人はもはや芸人ではないと言えるだろう。断食芸人が行っているのは断食芸ではなく、ただの断食だからである。人々に見せるためのものではなく、ただ自分のためだけに行う探求である。断食芸人は今や芸人としてではなく、一人の人間として生きている。

(3) 断食芸人の死

結局、断食芸人は「未知の糧」を見出すことなく死ぬ。断食芸人の最後の様子は次のように語られる。

しかし光の消えた彼の目にはなおも、さらに断食を続けていくんだという信念、もはや誇らしげではなかったが、固い信念が浮かんでいた。(D349)

この死をどう捉えたらよいのだろうか。ポリツァーは、彼岸にある「未知の糧」に到達したので「満ち足りた」ように見えるが、それは「死体の顔」にすぎないと言う³⁹⁾。ヘルムスドルフは、誇りを失い失敗したとの意識とともに死んだと言う⁴⁰⁾。しかし、ここで何よりも注目しなければならないのは、死んだ断食芸人の目にはなおも浮かんでいる「固い信念」である。それは、断食芸人が人生の最後に至って、自分の生きる方向をはっきりと見出していたことを示している。それに、断食芸人の死はひっそりとして目立たないが、カフカの他の作品の主人公の死と比べても、格段に力強いものである⁴¹⁾。失敗に終わった生を示唆するこれまでの主人公たちの死に対して、断食芸人の死は、自分自身の生に確信を持って生きた人の、静かで満ち足りた死となっている。「未知の糧」を得ることはできなかったが、それに向かって最後まで歩み続けたのである。

(4) 豹にはどのような意味があるのか

断食芸人が死んだ後、彼が入っていた檻には「若い豹」が入れられる。豹の様子は次のように描写されている。

そんなにも長い間ひっそりしていた檻の中でこの猛獣があちこち動き回るのを見ると、どんな鈍感な者の心も晴れ晴れとした。豹に足りないものは何もなかった。世話をする者た

ちは、餌を運ぶときに何がこの動物の口に合うのかと頭を悩ます必要はなかった。豹は自由さえ必要としているようには見えなかった。獲物を引き裂く力も含め、必要なすべてを備えたこの高貴な体には、実際また自由が宿っているように見えた。その牙のどこかにそれが潜んでいるように見えた。生きる歓びがその口から灼熱の炎となってあふれてきたので、観客はたじろがざるを得なかった。しかし彼らはそれに耐え、檻の周りに群がり、まったくそこを離れようとはしなかった。(D349)

断食芸人とは対照的に、豹は自分が食べる物にまったく迷いが無い。牙で獲物を引き裂き、その肉を食べる。食べるために必要な牙に「自由」が宿り、食べた口から「生きる歓び」があふれてくる。豹が圧倒的な生命力を発散することができるのは「食べる」からである。豹はつまり、「食べる人々」である世間一般の人々の理想的形姿であると言えるだろう。観客は、豹に自分たちの生が最高度に高められた姿を見ていつまでも檻の周りにひしめいているのである。

こうして読者もまた観客と同じように、豹の持つ生命力に心を高揚させられてこの物語を読み終えることになる。しかし、まばゆい豹の向こうにもう一度断食芸人の姿を思い浮かべ、もし断食芸人が「未知の糧」を見出していたなら、豹と同じように生命力にあふれる存在になったのではないかと想像してみることはできる。そのとき、断食芸人は肉を食べる豹とはまったく異なる存在として輝いたのではないだろうか。

IV カフカに即して

以上見てきたように、断食芸人は世間の賞賛でもなく、自身の記録でもなく、「未知の糧」を求めて生きることが自分の生の意味であることを悟り、これまで続けてきたようにこれからも断食を続けていくことに納得して死んでいく。つまりこの物語は、断食芸人が自分自身の生に対する認識を深めていき、ついに自分本来の道を見出すようになる過程を描いた作品であると言える。

ではカフカに即してみるなら、この物語はどのような意味を持っているのだろうか。

断食芸人は明らかにカフカの分身である。それは単にカフカが肉食主義的生活を送った⁴²⁾という意味においてだけではない。カフカの日記に次のような記述がある。

書くことが僕の本質のもっとも実り豊かな方向であるということが、僕という有機体の中で明らかになったとき、すべてがそこへと殺到し、性への、食べることへの、飲むことへの、哲学的思索への、そして何よりも音楽への喜びに向けられていたすべての能力を空っぽにしてしまった。僕はこれらすべての方向においてやせ衰えた。⁴³⁾

ここでは「書くこと」、つまり文学と、それ以外の「性」、「食べること」、「飲むこと」、「哲学的思索」、「音楽」が対立的に捉えられている。後者は一般に人が強い欲求を感じ、それを享受することで人生に歓びを見出している事柄である。カフカは文学に没頭することによって、それらすべての面において「やせ衰え」たと言う。「書くこと」と「生きること」の対立についての同じような記述はカフカの日記のいたるところに見られる⁴⁴⁾。

断食芸人と周囲の人々、「食べない人」と「食べる人々」の対照によって示されているのはつ

まり、人生の享楽から遠ざかり「書くこと」に没頭する人と、人生を享楽する世間一般の人々との対照である。カフカはこの物語において、書くことに集中してきた自身の人生を振り返っているのである。

カフカが断食芸人の物語へと抽象化したものを、再びカフカ自身の人生へと還元してみよう。思い通りにならないながらもとりあえずは断食芸によって自己実現をはかっている第一部は、カフカにとって次々と作品を発表していた初期や中期に相当するだろう。興行師は、カフカの前稿を盗むようにして取り上げ出版社に売り込んだブロートを思わせる⁴⁵⁾。実際、ブロートからカフカを紹介された編集者クルト・ヴォルフは、「興行師が自分の発見したスターを紹介する」ときのような印象を受けたと述べている⁴⁶⁾。また、断食芸人が観客や興行師と妥協しながら生きている姿は、ブロートに導かれて人々と交際したり、フェリーツェとの結婚を考えたりしたカフカを想起させる。このように世間とつながりを持つ一方、周囲の人々に妨げられずにひたすら「書くこと」に没頭することも、カフカは絶えず求めていた。フェリーツェに宛てて、「僕には生まれつき、途方もない禁欲能力があります」と誇らしげに書き、「僕は文学に関心があるのではなく、文学からできているのです。文学そのものであり、それ以外のものではありません」⁴⁷⁾と高らかに宣言しているところなどは、まさに断食芸人のヒュブリスそのものである。

また、ひたすら自分の断食芸をつきつめようとして世間と隔絶していく第二部は、結核の発症によってフェリーツェとの婚約が最終的に解消され、世間との関係を顧慮する必要なくなった1917年以降のカフカの状況を写し取っているだろう。ブロートはそのカフカ伝において、カフカがこの時期、「一切のことから身を引こうとした。ついには私との交際まで断ってしまおうとした」⁴⁸⁾と書いている。もっとも親しい友人からも距離をとったことは、断食芸人が「同じ道を進む一番の同志」(D343)とされる興行師と別れたことと符合している。しかし世間との関係を絶ったからといって、必ずしも生産的になれたわけではない。むしろ、しばらくは作品が生まれない状態が続く。これも第二部の断食芸人の状況と似ている。

こうしたときに、カフカはミレナとの出会いと別れを経験する。ミレナのことを「いままで見たこともないような生き生きとした火」⁴⁹⁾であると述べており、強烈な生命力を備えた豹は彼女の姿を映し出していると言えるだろう⁵⁰⁾。ミレナとの関係を経て、カフカは書くことに没頭し、生を味わうことをしてこなかった自分の生き方はこれでよかったのかという問いを自分自身に問い、その答を物語の形で求めたのである。

カフカは自分自身の人生を寓話的に振り返り、書き続けるのが自分の人生であり、それ以外に自分は生きようがなかったことを認識する。豹が享受する「肉」で象徴される、今目の前にある生のさまざまな楽しみとは異なる、自分に本当の喜びを与えてくれる生の糧、「未知の糧」を見出すことを目的としてこれからも書き続けていくこと、そのことに対する確証を得たのである。

むすび

カフカは世間一般に対して強い異和感を覚えており、それを作品においてしばしば具体的なイメージで可視化してきた。作者と世間の人々との距離は、たとえば『変身』では虫と人間の距離として、『あるアカデミーへの報告』では猿と人間の距離として示されている。カフカは人々

の間で、自分を虫や猿と表象するほどに異種であると感じ続けてきたのである。

では『断食芸人』ではどうだろうか。ここでは、カフカと世間の人々との距離は、「食べない人」と「食べる人々」との相違として示されている。しかし最後に断食芸人は、根本的には自分も「食べる人」であったと言明するに至る。これはひたすら世間に対する異和感だけを強調していたこれまでのカフカには見られなかった点である。そしてそのことを反映しているのが、この物語の主人公と世間の人々が同じ人間に設定されていることではないかと思われる。『変身』や『あるアカデミーへの報告』では異種同士であったものが、同種同士の関係に変わっているのである。そしてこれは、『断食芸人』以降の物語にも当てはまる。『ある犬の探求』ではカフカを思わせる語り手の「私」は犬族の一員であり、カフカ最後の作品『歌姫ヨゼフィーネあるいはネズミ族』の主人公ヨゼフィーネはネズミ族の一員である。カフカにとって世間との関係は後期に至ってそれまでとは明らかに変化している。距離が縮まっているのである。

もちろん、世間の人々との相違は依然として残り続ける。断食芸人は普通の人々や豹のように肉に対して食欲を覚えず、あくまで「未知の糧」を求め。しかし「未知の糧」とはいったい何なのだろうか。換言すれば、カフカは「書くこと」を続けていくことを通じて、いったい何を見出そうとしているのだろうか。

この問題は『ある犬の探求』に引き継がれていくことになる。なぜなら、そこにはまさに「未知の糧」を探求する犬が登場しているからである。

注

- 1) Kafka, Franz: Tagebücher. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1990, S. 922. また, Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Apparataband. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1996, S. 437 参照。
- 2) これについては, Walter Bauer-Wabnegg: Zirkus und Artisten in Franz Kafkas Werk. Ein Beitrag über Körper und Literatur im Zeitalter der Technik. Erlangen 1986 参照。バウアー＝ヴァブネックは次のように述べている。「断食芸の世界からの多くの要素がカフカのテキストの中に見出される。興行師, 見張りたち, 断食芸人と彼らの対話, 賭け, 断食芸人の怒りの発作, 医者たちによる診察, 断食期間の終わりが華々しく告げられ女性たちに導かれて最初の食事が厳かに取られること, 檻の中に閉じ込められること, 断食芸人の人気, 見世物になった結果死んでしまったりすることなどである。これらすべては, 正確には何を参照したのかこれまで明らかになっていないが, カフカが自分の物語のために実際の断食芸から非常に具体的な刺激を得ていたことを示している。」(S. 168)——なお近年の断食芸としては, 2003年イギリスでアメリカ人 David Blaine によって行われた 44 日間の断食芸が有名である。
- 3) Wiese, Benno von: Franz Kafka: »Ein Hungerkünstler«. In: ders.: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka. Düsseldorf 1956, S. 325-342.
- 4) Ebd., S. 333.
- 5) Ebd., S. 337.
- 6) Ebd., S. 336.
- 7) 「自由でしなやかに戯れる精神による生命実存の無条件の止揚は, 死においてのみ終わるだろう。これはネガティブではなく, まったくポジティブな意味である。つまり, それは自己表現の完成であり, 自己証明の達成なのである。」(Ebd., S. 339)
- 8) Politzer, Heinz: Franz Kafka. Der Künstler. Frankfurt a. M. 1978, S. 472.

- 9) Henel, Ingeborg: Ein Hungerkünstler. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 38, 1964, S. 230-247. 特に S. 237 参照。
- 10) Politzer, a. a. O., S. 471-473.
- 11) Hermsdorf, Klaus: Künstler und Kunst bei Kafka. In: Weimarer Beiträge 10(1), 1964, S. 404-412. この表現は, S. 407。
- 12) Politzer, a. a. O., S. 469, Henel, a. a. O., S. 233, Hermsdorf, a. a. O., S. 407.
- 13) Politzer, a. a. O., S. 469, Henel, a. a. O., S. 237, Hermsdorf, a. a. O., S. 407.
- 14) Henel, a. a. O., S. 237.
- 15) Hermsdorf, a. a. O., S. 407.
- 16) von Wiese, a. a. O., S. 340.
- 17) Hermsdorf, a. a. O., S. 407.
- 18) Sheppard, Richard W., Kafka's »Ein Hungerkünstler«. A Reconsideration. In: German Quarterly 46, 1973, S. 219-233.
- 19) Henel, a. a. O., S. 231.
- 20) Neumann, Gerhard: Hungerkünstler und Menschenfresser. In: Franz Kafka. Schriftverkehr. Hrsg. v. Wolf Kittler und Gerhard Neumann. Freiburg i. Br. 1990, S. 399-432.
- 21) Ebd., S. 430.
- 22) アウアーオクスは, 2010 年に出版された『カフカ・ハンドブック』において, ノイマンの研究を「その後もこれを超える研究はなされていない」(S. 323) ときわめて高く評価している。Auerochs, Bernd: Ein Hungerkünstler. Vier Geschichten. In: Engel, Manfred / Auerochs, Bernd (Hrsg.): Kafka Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart・Weimar 2010, S. 322-323.
- 23) Biemel, Walter: Philosophische Analysen zur Kunst der Gegenwart. Den Haag 1968, S. 38-65.
- 24) Ebd., S. 64.
- 25) Beicken, Peter U.: Franz Kafka. Eine kritische Einführung in die Forschung. Frankfurt a. M. 1974, S. 319-324.
- 26) Ebd., S. 322.
- 27) Ebd., S. 323.
- 28) Ebd., S. 324.
- 29) Ebd.
- 30) Heller, Paul: Franz Kafka. Wissenschaft und Wissenschaftskritik. Tübingen 1989.
- 31) ヘラーの解釈は『キントラー新文学事典 (Kindlers Neues Literatur-Lexikon)』で『断食芸人』解釈の一つとして採用されており, 一定の評価を受けていることがわかる。
- 32) Alt, Peter-André: Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie. München 2005, S. 647-653.
- 33) Ebd., S. 651.
- 34) Ebd., S. 652.
- 35) 従来, この物語は二部構成とされてきた。第一部は断食芸人が興行師と共に興行を行っていた前半, 第二部は興行師と別れ, サーカスに身を寄せることになった後半である。しかし, 断食芸人の自己認識の深化という観点から見ると, 断食芸人の死を描いた最後の部分は第三部として第二部から独立させるほうがいいと思われる。第三部の直前には空行があるが, このことは第三部こそがもっとも重要なのであって, それのための前提として第一部と第二部が必要だったことを示しているだろう。
- 36) ここで自伝的作品群と呼んでいるのは, 初期の『判決』や『変身』, 中期の『流刑地にて』や『あるアカデミーへの報告』, そして後期の『断食芸人』, 『ある犬の探求』, 『歌姫ヨゼフィーネあるいはネズミ族』などである。『あるアカデミーへの報告』における「世間」との関係の問題については, 佐々木博康「『あるアカデミーへの報告』——世間で生きること——」(古川昌文・西嶋義憲

編『カフカ中期作品論集』 同学社, 2011年, 351-381頁) を参照のこと。

- 37) 断食期間が四十日なのは、イエスの行った断食期間からきているようである。新約聖書の「マタイによる福音書」第四章第二節には、イエスが四十日間の断食を行ったと記されている。16世紀に断食少女たちによる断食ショーが行われたが、それは四十日間断食したキリストの後継者の様な行為であると理解されたとのことである。(Neumann, a. a. O., S. 406f.) また、近代になって最初の断食を行った Henry Tanner の断食期間も四十日間だった。(Bauer-Wabnegg, a. a. O., S. 167)
- 38) 『断食芸人』の引用は, Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994 による。本書からの引用は、略号 D とともに頁数を挙げて示す。
- 39) Politzer, a. a. O., S. 470.
- 40) Hermsdorf, a. a. O., S. 407. その他、ヘーネル、シェパード、バイケン、アルトは断食芸人の死を肯定的に捉えるが、その場合もそれまでの虚偽的だったり、プライドにとらわれていたり、人々に認められなかったりと、いわば間違った生から脱したという意味で死が肯定的であるにすぎない。
- 41) 『判決』のゲオルクの死は、社会的存在として生きられないことをわびるような悲しい自殺である。『変身』のグレゴールは、家族のためには自分がいなくなった方がいいのだという自己犠牲的幻想を抱いて哀れにも死んでいく。『流刑地にて』の士官は、処刑機械に自ら身を投げるが、望んでいたエクスタシーが得られずみじめな死を遂げる。長編『訴訟』のヨーゼフ・Kは最後に「犬のように」殺伐と処刑される。
- 42) カフカ自身は厳格な菜食主義者というわけではなかったが、肉を食べないなど菜食主義的な生活を試みている。
- 43) 1912年1月3日の日記の記述。Kafka, Tagebücher, a. a. O., S. 341.
- 44) たとえば、1914年8月6日の日記の記述。「僕の夢のような内面生活を描きたいという気持は、他のすべてのことを副次的なことにしてしまった。それらは恐ろしく萎縮し、萎縮することをやめない。」(Kafka, Tagebücher, a. a. O., S. 546)
- 45) カフカはヤノーホに、ブロートを始めとする友人たちが自分の原稿を奪うようにして出版してしまうと訴えている。「マックス・ブロート、フェーリクス・ヴェルチュ、そうした友人たちが皆、私の書いたものをなにかと取り上げてしまう。そして、いつの間にか出版契約を結んでしまっただけは私を驚かすのです。私はその友人たちに不快を与えたくない。そこで、もともとまったく私的な手記や筆のすさびにすぎぬものが、結局出版されてしまいます。私の人間としての弱点の個人的な証拠書類が、印刷され、しかも売りに出るので。マックス・ブロートを筆頭に、友人たちがそれを<文芸>に仕立て上げようと妄想しているためであり、私に、孤独の証言を破棄するだけの力がないためです。」カフカはこのように述べた後、友人たちを非難するような物言いをすぐに反省したのか、次のように付け加えている。「事実は、私自身これらの出版に協力している。私はすでにそれほどの恥知らずに墮落しています。自分の弱点の口実に、私は私の周囲の影響を実際以上に誇大視します。これは当然欺瞞です。」(Janouch, Gustav: Gespräche mit Kafka. Aufzeichnungen und Erinnerungen. Frankfurt a. M. 1981, S. 40-41. 訳はグスタフ・ヤノーホ(吉田仙太郎訳)『カフカとの対話』筑摩書房, 1994年, 43頁) —なお、これについては Hillmann, Heinz: Franz Kafka. Dichtungstheorie und Dichtungsgestalt. Bonn 1973, S. 89 を参照。
- 46) Binder, Hartmut: Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen. München 1977, S. 116.
- 47) 1913年8月14日付フェリーツェ宛の手紙。Kafka, Franz: Briefe an Felice. Hrsg. v. Erich Heller und Jürgen Born. Frankfurt a. M. 1976, S. 444.
- 48) Brod, Max: Über Franz Kafka. Frankfurt a. M. 1980, S. 149. 訳は、マックス・ブロート(辻理ほか訳)『フランツ・カフカ』みすず書房, 1987, 190頁。
- 49) 1920年5月初めにメラーンより出されたブロート宛の手紙の記述。Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Hrsg. v. Max Brod. Frankfurt a. M. 1975, S. 275.

50) 筆者の知る限り, これまで豹にミレナが反映していると見た研究者はいない。

Kafkas *Ein Hungerkünstler*

— als Schreibender leben —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Kafkas Erzählung *Ein Hungerkünstler* wurde 1922 verfasst und zusammen mit drei weiteren Geschichten in die gleichnamige Sammlung aufgenommen, die 1924 veröffentlicht wurde. Die Geschichte ist als Er-Erzählung geschrieben. Sie handelt von einem Hungerkünstler, der seine Kunst zur Schau stellt und letztlich, als sich niemand mehr dafür interessiert, in seinem Käfig stirbt.

Der Hungerkünstler steht für den Schriftsteller Kafka – ein Asket, der sich von allen Genüssen des Lebens – dem 'Essen' – fernhält und sich mit ganzer Kraft dem literarischen Schaffen – dem 'Schreiben' – hingibt. Durch die in seiner letzten Liebesbeziehung mit Milena Jesenská gemachten Erfahrungen in seiner Lebensführung unsicher geworden, ist die Geschichte der allegorische Versuch einer Selbstvergewisserung: Wie der Hungerkünstler, der sich und seiner Kunst bis zum Ende treu bleibt, erfährt Kafka sein dem Schreiben gewidmetes Leben als sinnvoll und bejaht es.

【Key words】 Hungerkunst, Panther, unbekanntes Nahrung, Welt, Künstler